雑談紙屑籠後編　上

ヘ3
3125
4

特
へ13
3125
4

序

昔ゝより乱白柄組長巻組拵て男伊達
仲間ある所事をゝそて喧嘩ゝらて爾あり。
みゝそも切刃まろ刀。中のよゝ盟約ゆも猿とり
殺をつき。血をまて合て兄弟ゝ結る拵ゆ
雑をつくるゝ。赤刀ゝも男ゝ。ゝ
よゝのゝ和ゝさゝそんゝ書ゝ野暮ゝいゝ。ゝ刀
屋ゝゝ者ゝゝ塗ゝゝ式ゝ。喧嘩ゝも接種ゝ

老人所を持ちて人のまさといとど繁ふる
血をとりぬれば海つぶ神輿さえぐをとりて
何ぞ長くまこと弟子人間
御供をゆ豆餅よかへ奉るべ進すのこと
砂糖うけてこ氏神も吾ぬ一ちのの
拙筆も殺ぬ中ゆくつるとこ酒るまべ蔵
そふも吉れぬこ供の子供ぞさもれば近年生
殺のぬらこるを中ぞ雑き養年生

御代ちこ我あるまきも若ちる孫だ馬の
あふまを新成の茶若だ形ちよ文ゆくこも
書こぶ手稚くを耳ようとそこつこまべ
まで年其我も明ちを忘の吾だ年障
子ゆこ書こ少拙ちこ

文政年号要

十返舎戯著　全二冊近刻

浮世道中花雲駕

十返舎戯著

文政年号要　十返舎戯著　全二冊近刻　浮世道中花雲駕

雜談紙屑籠 後編 上冊

一名 反古張障子

十返舍一九著

酒ぬけ元ろう手寄の冷ものいひ有ぶけの慾
たゆりとんぐ後生頼ひの浮世ばなし

商人相場の利ぶを見うるぶ。ぶいハ元虫でぶぶう
ままとと。沢山ふよ誓文ぶて。まるハ。ふ偽ふして回
舎ものぶ。ぶもも。花でどぶるとりてふあみ。ぶ。まぶそ
うも。老人八平巡中。て虚ふつ。ムつうぶりのと。神ふ医

人も有まで。とても仏事ばかり。今ぞ。もわろう程
生て孫ひ。はかり男ゆうくとの長生。一日も早く
拾ゝ乗雑生ゞ。ゝ石とぶつかもちの下かゝ。坂の庵ま
柿の接をとゝ人で。八年もとゝゝべ孫ゞのふちの上柿
のゝひあきをさまゞゝ。ゝゝゝと絡乗。小柚も高
身八ゝ。ゝとて。花食紙を好ゝ。子ゞもゞ元服ゝを
ゝて死ゝべ。もゝやゝの世ふあひ孫をゝゝるい。それ
ゝゝ人ゝあゝゝぬゝゝよ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの

預ひ。ゝゝゝゝゝ月日ゝゝて。母子元彼ゝゝゝゝ
あゝゝ姉をゝ引て孫をゝゝゝゝゝゝゝの会釈。まゞゞ
出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぎょうのるの身でハ形〳〵。まこと喧嘩のまとる〳〵るどまるこそて
コヤ〳〵ゞ身でハるんゞこと。きこゝまとてとり人ハ色者の初ま
仏ど。おまどゞ身〳〵いゞ。そとよくちのあくべまこう。あうも
二本さ〳〵ろ人のこちら〳〵ハ拵ものしてゞるゞ〳〵。そまてもハ
きゞ女のらくハ。おどけ形〳〵て。粉〳〵きゆうゆもあるゞたれど。
女も濡〳〵こるうてのこてゞゆハ。粉ゆて羽ゞる〳〵
こう〳〵ハの世界。一切の男女年ようて色こさうてハ
わうふこの〳〵こる〳〵ハ人ども。男ハあとゞけの徳分

あうて酒好るゞ〳〵ハ酒とこの〳〵。あるのハ拵ものハ
茶の色和茶ハたうい。茶れる茶みど。こまとく〳〵の茶色
あうて。あこゞ上ハ作るうたまとども。女ハ濡〳〵こるう
て。男のどく〳〵日毎の遊こ。ちう〳〵ゞ。茶屋のかこく
人の作るいようるうふ。ハ。ハ。ハ

とかくとあり。年の頃五十の男のせなむしろにてそこなふゆゑ
ゆゑどのあつてやときけば。さるべとそうちのといしも
腐毒さえよう保ることその後のむしろぶとそ吐め
ぐつつていくつあるかの食事ふ。何もあるべきもの
ふ。おろかなり。呉規ることの薬めでぐしの日とそ
丹解の薬しと。ゴバラ丸もらひるあとあて。
その儀ふ人まねうまし。贈のまとしくさうるふ。外廣
とんあくと。入まて考ることを者ゆしてまづこの酒を

酒とたべ飲ることあるとうあるくきあのひしとと
ろるとこ。此者痛へいふぞ。絶ぐられやうまあ。医者屋
とよびて。ことすりひ一本ふ。ことは兵のまとうふるる
とふ病毒のくすりと持ありとうまと言ふ。ことて
用ひなどしとそのくすりとうまとれしぶ。病人のうふ
ふ。茶ようへ茶漬ぬるとくぶ。ぬるんぬ
茶とうけて。飯いくといくとくぶさとそとて。もも
あるまうすしとく角とうすしと耳とうとて茶とうむ

やうなことをいへば。ふるきものゝ復生をゆめ。そこ
ゝの姿もゆゝしべかるまーづかがるゝ。ぐうしうまをゆく茅ら
ぐ。紙ーしかお穢でもーそうくゝ。ナうをべらやくくうをくも
そうも利まる事い。そうーの事のうづるのふ腹のうそで
るーぐ。そうのそこでかづるゆうるーとらひまをゆく。そまふ
ぐゆーことを。よくくゝ。ゑ。ゑぶ。茅後後のあで
かづつるを程。猪のうきふ。ふるる風ぐこふ。ふうで。こび
をついてるまーを。あるゝ年ふ不ぶるまうくを。後生不

上巻

ゐ多食くうげできくもあるーく。後耳をまるーく
きけべをるもおるーぐ手代の狐毋。まるーの尾ふつを。
そうくゝの毛の猩虫。あくをでよいおをゆをこふひき
久ををーのをゆうの用ををうむをふ後ふ茅のうくで
るいうう。猩性をくくをうの毛でかーをぐもの者ふ
ーをぐふのまゆーを過ぐ。雑ゆゆーをつうふをまを
ゆべをふナをうくおふひまーをぐ。をうーのううでも。
をるうのあゆーー猩を。かーをれふくをぐふへーー生をね

ゆくそばでかもいひまきぬぐ。よる在家まるりて。けどろん
ちやうあねぐさんのこと。ごろ程とそあの屁のたきさ。
今よ男ちりて。乎でも考えとこ。あのおるどん産
ぐ。筋へたちるまいよ。笑止をやくこ。まこひろぐ
さそも今附のこどもしゆ。ゆん。油断ぐるこぬ。ここの
むこのむとあも。不孝ぐ。ふる者とて。ぐとくく
ろくでもるい三傍をひぐたそるやうるーさ。ぐ
親きたよい事ぬ。あまるちん陣屋のぐげで

上み

あまるぐるろくこのゆく。在ともりて。稼ぐもを
させやうとおひまきと。あのようげけ取たどのぐ。
ろくふうぐひも黄にくく。羅反のようぐまとこくて。
自腐してゆくまーこぐ。きけべ此ぐ。ろい且那が
つくこいとこで。乃程とそきのつるお興帳まのうま
いろまろ系を見ーこぐ。娘ろこ。ぐ。娘ろこ。ぐ。娘ろこ。ぐ
小物こまぐ。ぐ。ぐ。

まいぶん。第五章づゝ。男子をまとめる。あのふ家名
をおもとめよ。ざのぞうるぶんるがつゝと。あひまりとあが。
横所の貨家の使者慶既。うるさるもぜんドの巫女。
小びんさんの元てある。ぎくろだるの。指をえるのうる親元
女とりつゝめ主さうぬもの。あのまゝ牛九さんめをころめ
おもものさるーぜぞんどうこれい第家六十人並ごがようう
ぞうぐさ拾てゆるこの浮利。そのう人あのをーふるつて。まぐ
霧小男をきるとのる。そをとゆくごこらつてさぎぐよ 追

出さをとてゆる。そをを親先へ。ひをーい癌の病ひでひと
ころへうまくうぐ。ふいさひある主義をとうちまぐ
をとて。茶を者るかゆがるふそうそこーのあの癌父の
ちびんがあるこゆ。そをとをゆのふ。ぷうを蜂ーをエ
おうげでをとで。茶をゆまをとく。ぷうまをとことがあるま
こうぐ。ぎこをぎ。ゆをとうおをあげ。四今の大ぐのめうゆよ
るゆ。今ぐへ拾。ぜあぐも。あの癌うきぐのがをー
なるで。主拾ぐをこの癌へかーをのる。をんよ人とうをあへ

ととーー猪よりぐよくちゃくぐ。ぼーーの こんぼを見て。あの
むーーまちのびぐをまが。ぼをもて時ろぐでん 猪体ぐひとうをい
とらーーぐ。ぼーーの内衣のあるいのを。ぼをでもかぶせて
あきるさをて。もってらてものをぼ。支度るぐーー。猪を
こぐーーて。この出屋へぼをまをとまをぬーーぐれーーー屋をひーーと
ーーまで。ぼーーの家へきてん。指みまを。ぼーーぐ。
ーけるぐーーぐりまをぬ。ぼーーのと一ぐーーてきーれーー。まーと
ーーをぐやーーーん。ぼーーぐーーーーーぐぼをふあーーまを。人の完後

のん。三年でもーーーーてあーーまをーーぐ。自分の身をーーーん。
ーーーーを。ーーーーー

しるるうひとりの御母。さいのでく。くにこるる千義百刑。あの
おどる老とのく嬢へ。遠国さるとまるのぶ。今夜でてうど十
七歳のりよ中郎さげて。ぶ。あらこるるとび。竜のおのほるを
るげらごて。郎よの良もむうどよかちうるみぐ。伊世五ろ
でよくくこちうひ。ふぐけちとてみ。ろくこぶ。きけびあのぶ
くくしぶ。ゆくくなごとくくてみるとのるぶ。むくるたとうくへ
あをでまる鹿よ。ゆくうくへまをつ九のくゆぶ。むをゆ
とくくてうくまぶ。をちへスくくもくく所貸くく出て来て。

まち屋のくまおもゆ。ろくくぶ。ををちまをを見。相あうる
りのでもあることろ。あのどくくの用金くりのく小聖弟と。念
ぶくて。ゆと老ようくくりへぞ。よりりやゆ気でへあるまへ。お
のををへゆぶでつきりのでもくて。みるでまるうとうゆを。嬢へ
ちうを老のくぶ。ろふつきりのでもどぶくへぬやをうゆくりのへうう
をうことと。一すの毒ゆもゆ分の魂とゆくりくりくくて。ぶくへ
りへゆけて。角金のゆゆくくもよいゆうる男と金ぶをくくて
つまうるぬのくへゆりるゆ。級ぶくるをへ老ぶるぶ。ゆの

やうな ゆやろうよ 惜しむ。こうしの因果。ぞんしんとゝゆう。
いまの身でこうしのとうぶ。ごうがとゝまれかとおうくりの。
世すすめ。あくうぐく きもるる。新さちのかめ くんもの
しうかうしのうぶいのそ 動者でもして。遠年してやさる
ぶ。お世話ぐをうくしいふものとその新のゆくさ。新仏へ
新小袖とかして。後とうそ。おのまとれが居ま
ろう。動者してゆうぐさうけ出て。ゆくまるはすうぐと
いかて。そまへまうしの物ふあることゆくまようかとお世

うとかへろうまうとゆけとまるよ。新仏も姫ゆ後先
の後ぐきうれて。ふりとゆ出てうせあれ。動者まるぞ
しいふまて。まうぐうちへるとう。此さもあもわいでやき
ゆうまうと。物もまとうまぐい。ふ後ゆるあもあまぐある
かの猪ゆやふあまとい。ふうるげふ新をいるたの
ろうぐでゆう。まとも姫へ鼻もうどうさぐきようう
そうと新身。出ふうくゆうぐ。後きうついて天れて。
ひとゆとうふとと。ろんと大きまとて不孝なむまあ。ひう

なりそなえとらつかも。親をば月にふ月ごゆく。なんのこと
いるい。むとりあげ親と。捨てあるのでどうまとこの
ものと。ふぜのよう。次のるゆて開てみるに男。まくり
出て。今あたるーの姫だへそれでも大きふ。大きる出世
いこさもこませこらふ。それ他とーて。あの子物りのが。
舞こそあこそ。安世去ようとへ。ふんるもとらくべ。ものそ
親だの名と。むーるとーいつどへどうませぬう。そとで嬉が
親だを。何とみるこいひるこゆ。出世去よふうこいよ

上十一

こけへむーるこ何てきの悪いこいふとーあるこうと。天
笑ひよるうてたたる。意気兄子のあーきの。親の育
掘あーきと。女きこのあーきよりう。出ると舟て浅
づうひのあーきのへ。出兵とうけてあーだー。呑くーて金
を溺るゆ何へ。親をるよくたどこ。世るの人ゆも不義
親をせまど。あこ親よ義飛こ。報をもまるるとべ。孫
まつけところーげるが親。孝ちあくと。ほーが。あード
けふき人の孝何るを

上十二

慾の川乗合おぶね　序

むかしの人間へ賢き人へまじり愚かなる人あらんをて純智のふるまひ。格外のお遠あるべしと。今ごろの人は愚の知恵をつて生まれ。ふるまひ。てその道くと。まことの慾つきまことのことろの慾きれひとりあるし。財産商賣の道は驚くまうをを制て工夫あるべしとこをそのの日よりあれうぶせるうくしいろ斗ふ金すうけへさせておうぬよの中。紙下所の思ふ。種のくしごころ。妻のまうこをしてんせるとよりてかやうなる人ぬぬふいうこうものと。ゑの秘せうとうさうくしてかたちのべ。合点せぬ人ごろ。此草紙も世界の人情の写真。教のこゝろ。目をゆうこさふしの種をかきあつめて。とそうの彰徳の仲間入とまるりれるうし

十返舎一九誌

第一
鶴の子
信あれば徳用向
欲あれば
如待と祈願の利益
自鶴の意趣

そのるつ

第二

おもて番付の隠語

天窓うゝ毛ますの面と春よ
色い男妾の外どうかうなると
ますのはこの弦

つぎ
とんくちき
くちん
ちきちん

とんくちき
くちん
ちきちん

第三

貧のわけとこそ
とこそ
番の取の無分別

第四
山男

十三